

章 海外動向の把握

我が国と欧米4カ国（米国、フランス、英国、ドイツ）の休暇制度や旅行動向について、リゾート事業協会の「リゾート白書」等の既往文献に掲載されている統計データを整理し、二地域居住の動向を比較する。また、スペイン及びイタリアに関する有識者ヒアリングの結果を補足的に加えるものとする。

なお、以下の文中における下線は、二地域居住に関する要点を示す。

1. 国内外のデータ比較

(1) 休暇制度と旅行実績

休暇制度

- ・二地域居住の動向に関わりの深い休暇制度について、各国の状況を整理したものが表-1-1である。
- ・労働時間は、欧州3カ国に比べて日米の2カ国が長いことが分かる。フランスでは1982年の法令により週39時間と定められていたが、失業対策の一環としてワークシェアリングが進み、賃下げなき週35時間労働が2000年1月より段階的に導入されている。EU諸国の中では、ドイツは最も労働時間が短く、英国は最も労働時間が長い国となっている。
- ・祝祭日は、日本が15日間と最も多く、他の4カ国は11日前後である。米国では、祝祭日が土曜日または日曜日に重なる場合は、金曜日または月曜日に振り替えられている。また、フランスでは、祝祭日が火曜日や木曜日にあたる場合は、月曜日または金曜日を休暇にする制度がある。

表 -1-1 各国の休暇制度等の比較

	米 国	フランス	英 国	ドイツ	日 本
労働時間	年 1,943 時間	年 1,554 時間	年 1,888 時間	年 1,517 時間	年 1,948 時間
祝祭日	年 10 日	年 11 日	年 12 日	年 11 日	年 15 日
学校休暇 (小中学校)	春期：7 日 夏期：70 日 冬期：10 日	春期：17 日 夏期：62 日 万聖節：10 日 クリスマス：17 日 冬期：16 日	復活祭：14 日 夏期：49 日 秋期：7 日 クリスマス：14 日	復活祭：7～21 日 夏期：42～49 日 秋期：7～14 日 クリスマス：14 日	春期：11 日 夏期：37 日 冬期：13 日
	合計：87 日	合計：122 日	合計：84 日	合計：70～98	合計：61 日
就業者の 有給休暇	勤続1年：9.6 日 " 10 年：16.9 日 " 20 年：20.3 日	年 35 日	年 28 日以上	年 30 日	付与日 18.2 日 取得日 8.8 日

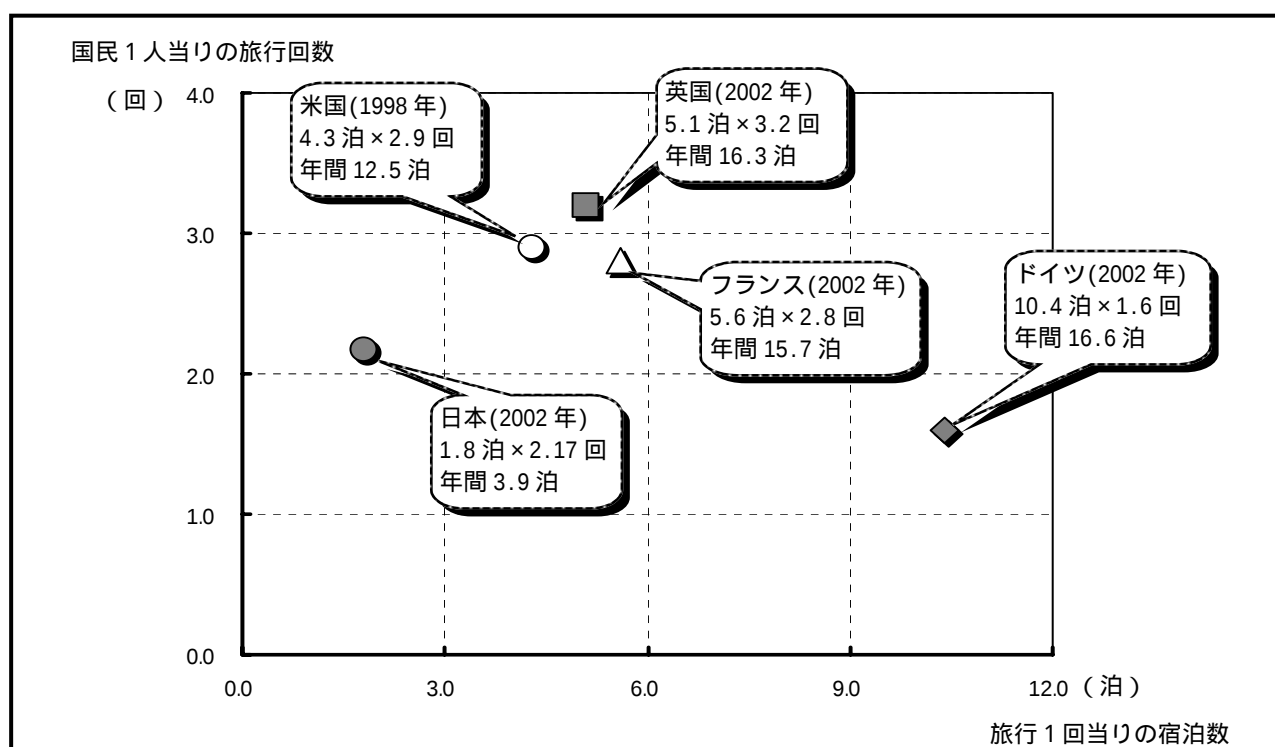
資料：国際観光振興会「世界と日本の国際観光交流の動向 2002 年版」

- ・学校休暇は、年間の合計で見るとフランスが 122 日間と最も多く、最も少ない日本（61 日）の 2 倍となっている。日本と他の 4 カ国を比較すると、夏期休暇の日数に大きな差があることが分かる。ドイツ及びフランスの夏期休暇は、観光地や交通機関の混雑緩和のため、州または地域によって時期をずらして設定している。
- ・就業者の有給休暇は、欧州 3 カ国に比べて日米の 2 カ国が少ない。米国では、勤続年数によって取得日数は異なるが、100% 近く消化している。一方、日本では、付与日の 48% しか取得していない状況である。フランスでは、少なくとも 2 週間つづけて休むことが義務づけられており、またドイツでは有給休暇が未消化であると、企業は退職時に賃金で払うことになっている。
- ・スペインでは、子供は 3 ヶ月間の休暇があり、高所得者層は 1 ヶ月間、労働者層は 1 週間から 10 日間程度のバカンスを取っている。

国民 1 人当りの旅行量

- ・各国の国民 1 人当りの旅行回数及び旅行 1 回当りの宿泊数から、国民 1 人当り年間宿泊数を算出し、整理したものが図 -1-1 である。
- ・国民 1 人当りの旅行回数は、多い順に英国（3.2 回）、米国（2.9 回）、フランス（2.8 回）、日本（2.17 回）、ドイツ（1.6 回）となっており、多い国で 3 回前後、ドイツはその半分で、日本の旅行回数は決して低い水準ではない。

図 -1-1 国民 1 人当りの旅行量



資料：リゾート事業協会「リゾート白書 2004」

- ・しかし、旅行1回当りの宿泊数を見ると、ドイツが10.4泊と突出して多く、フランス5.6泊、英国5.1泊、米国4.3泊というように、日本(1.8泊)はドイツの5分の1以下、他の3カ国の2分の1以下である。日本では、1泊もしくは2泊の観光旅行が多いことを示している。
- ・国民1人当りの年間宿泊数は、ドイツが16.6泊で最も多く、英国(16.3泊)とフランス(15.7泊)も近い水準である。米国は、欧州3カ国と比べると4泊程度少ないが、それでも日本(3.9泊)の3倍となっており、二地域居住であるか否かの判断は微妙であるが、我が国よりはるかに長い日数の旅行が行われている。
- ・イタリアにおけるバカンスの期間(表 -1-2)は、旅行量としては把握されていないが、欧米4カ国と同様に長期間の宿泊を伴う旅行を行っていることが分かる。

表 -1-2 イタリアにおける4半期別のバカンス期間

4半期	4泊以上の宿泊割合				
	4 - 7泊	8 - 14泊	15 - 21泊	22泊以上	合計
1 - 3月	67.0%	23.7%	5.4%	3.9%	100.0%
4 - 6月	66.9%	22.9%	7.1%	3.1%	100.0%
7 - 9月	36.5%	32.1%	17.7%	13.7%	100.0%
10 - 12月	75.6%	17.7%	4.1%	2.6%	100.0%
合計	49.3%	28.1%	13.0%	9.6%	100.0%

資料：イタリア国立統計研究所「国内旅行統計」2001

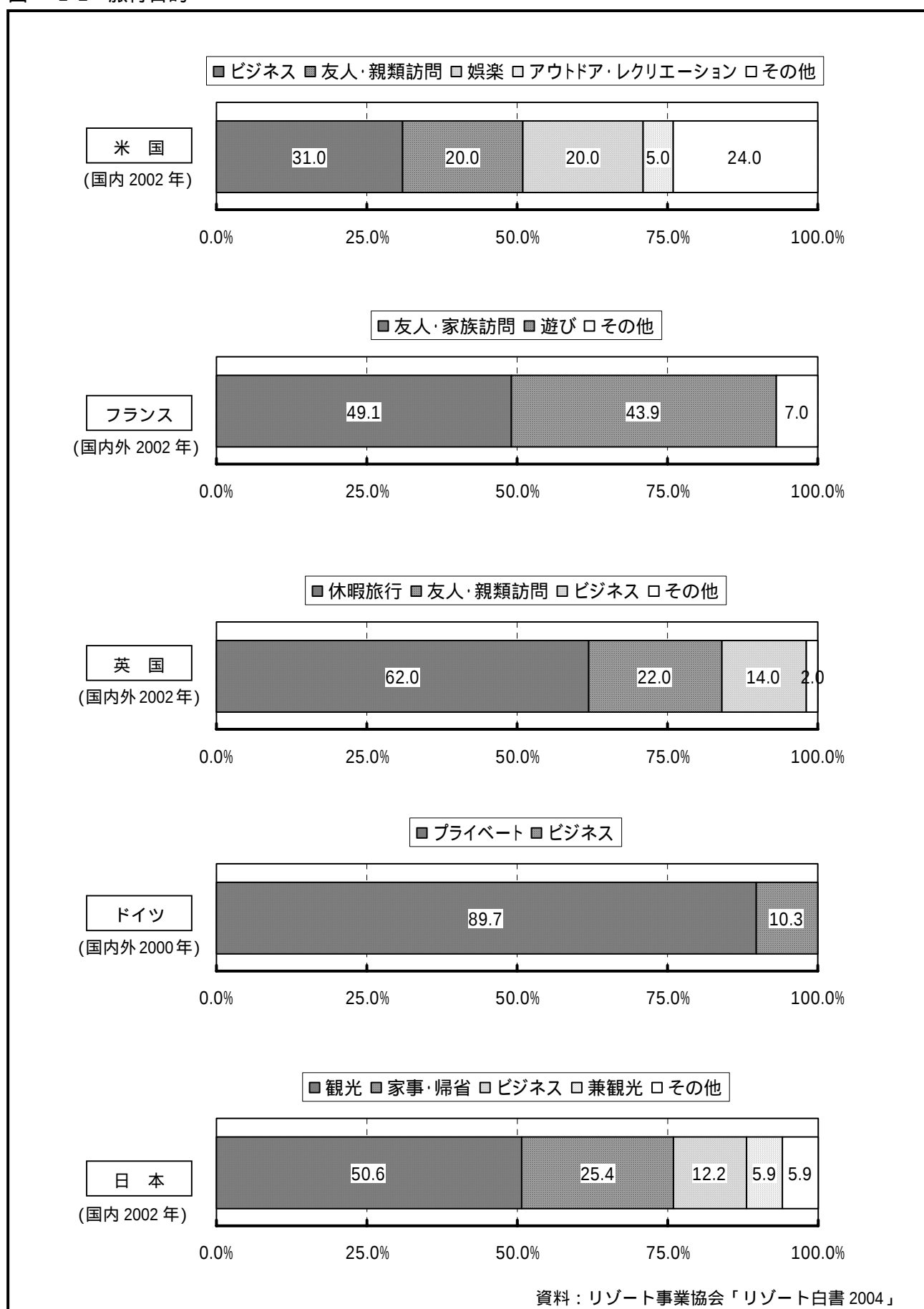
(2) 旅行動向

- ・海外における二地域居住の動向を探るため、欧米4カ国と日本の旅行関連統計データにおいて「旅行目的」「利用交通手段」「利用宿泊施設」を比較する。

旅行目的

- ・旅行目的(図 -1-2)の分類は国によって異なるが、欧米では「友人・親類・家族訪問」が大きな割合となっており、特にフランスでは約半数(49.1%)を占めている。日本では「家事・帰省」(25.4%)が類似しているが、後述する利用宿泊施設で「友人・親類宅」が少ないことから、友人を訪問することは少なく、お盆や年末年始の帰省が大半を占めていると推察できる。なお、フランスのデータは、プライベート旅行を対象にしていることからビジネス旅行が除かれている。
- ・米国では、「ビジネス」(31.0%)が最も多いが、近年では子供を連れていたり、週末の宿泊を伴ったりして、日本の分類でいう「兼観光」が増加している。また、「友人・親類訪問」(20.0%)を目的とする旅行の中では、離れて暮らしている家族に会うために旅行に出かける人が多く含まれている。

図 -1-2 旅行目的



- ・フランスでは、「友人・家族訪問」(49.1%)と「遊び」(43.9%)の二項目に分類されており、ほぼ同じ割合になっている。後述する利用宿泊施設では、「友人・親類宅」が53.7%となっていることから、それ以外の宿泊施設を利用する人の多くが「遊び」を旅行目的にしていると考えられる。
- ・英国の旅行目的は「休暇旅行」(62.0%)が最も多く、次いで「友人・親類訪問」(22.0%)、「ビジネス」(14.0%)の順になっており、日本の旅行目的の割合と類似している。
- ・ドイツでは、約9割が「プライベート」旅行であり、「ビジネス」(10.3%)旅行は米国や英国に比べて少ない。
- ・イタリアにおける旅行の目的(表 -1-3)は、欧米4カ国とは分類が大きく異なり単純に比較できないが、海や山に行く旅行が最も多い。イタリア人は、風光明媚な場所を観光するよりも、リラックスできる海や山などで自分の好きなことをする志向が強く、一般的に繰り返し同じ場所に行くことが多いと言われている。

表 -1-3 イタリアにおけるバカンス期間別の旅行目的

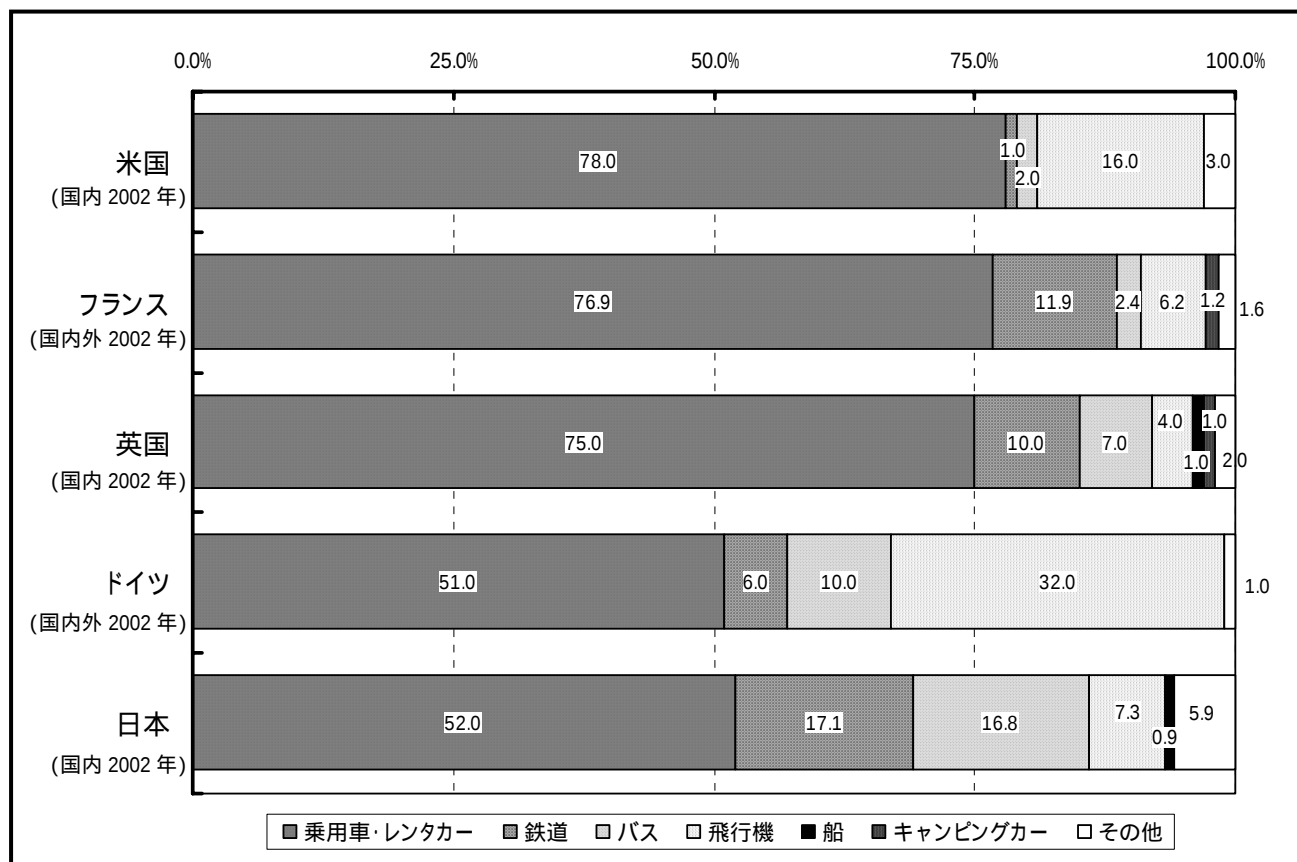
目的	バカンス期間		
	1-3 泊	4 泊 以上	合計 各目的/全項目
海	27.7%	56.9%	45.8%
山	22.0%	16.4%	18.6%
観光旅行	16.4%	10.6%	12.8%
芸術文化都市	15.4%	6.9%	10.1%
田園、丘陵	4.4%	2.9%	3.4%
湖	3.1%	1.4%	2.0%
スポーツ	3.4%	1.1%	2.0%
スタディ・ツアー	1.1%	0.9%	1.0%
アグリツーリズム	1.3%	0.6%	0.9%
クルージング	0.1%	1.0%	0.7%
その他	5.1%	1.3%	2.7%

資料：イタリア国立統計研究所「国内旅行統計」2001

利用交通手段

- ・利用交通手段（図 -1-3）については、フランス及びドイツのデータには国外旅行も含まれているため、5カ国を単純に比較することはできないが、各国とも「乗用車・レンタカー」が最も多く、特に米国（78.0%）、フランス（76.9%）、英国（75.0%）は4分の3を超える高い割合となっている。
- ・国外旅行を含むドイツとフランスを比較すると、ドイツでは、「飛行機」（32.0%）の利用が多いことが分かる。ドイツには、スペインやイタリアなどの地中海沿岸に別荘を所有する人も多く、またそのような地域へのパッケージ旅行も盛んであることも大きな要因と考えられる。
- ・日本では、他の4カ国と比べて、「鉄道」（17.1%）及び「バス」（16.8%）が多く占めているが、これは新幹線が整備されていることや、低廉なバス旅行のツアー利用者が多いことが影響していると考えられる。また、高速道路の通行料金も欧米と大きく異なる点であり、高速道路の低料金化や無料化が進めば、日本でも乗用車利用の割合は増加すると思われる。

図 -1-3 主な利用交通手段



資料：リゾート事業協会「リゾート白書 2004」

利用宿泊施設

- ・旅行で利用する宿泊施設（表 -1-4）は、「友人・親類宅」が大きな割合を占めており、米国（52.0％）、フランス（53.7％）、英国（35.0％）では最も多く利用されている。ドイツでは12.0％と他の欧米3カ国と比べて少ないが、これは国外旅行を含んでいることによる影響が大きい。
- ・フランスもドイツと同様に国外旅行を含んでいるが、フランスは国内に優れたリゾート地を有していることから国内旅行が盛んである。また、長期休暇の際に、友人・知人同士がお互いの住宅を交換することも広く行われているなど、小学生で122日間、就業者でも35日間の長い休暇を安上がりを楽しむために工夫していることから、「友人・親類宅」が多く利用されていると考えられる。
- ・別荘、貸別荘に関しては、米国5.0％、フランス14.8％、英国15.0％、ドイツ25.0％、日本2.5％となっており、日本は最も低い水準である。別荘の利用割合が最も多いドイツでは、旅行1回当たりの宿泊数が10.4泊と長く、別荘も「長期滞在用住居」と分類されているなど、二地域居住が一般的に行われていると言える。
- ・日本でも長期滞在や反復滞在が進めば、料金の高いホテルや旅館の利用割合は減少すると思われるが、狭い住宅事情から欧米並みに友人・親類宅の利用が増加するとは考え難いため、フランスや英国のように、貸別荘や貸部屋の需要が高まる可能性は十分にあると考えられる。

表 -1-4 主な利用宿泊施設

国名	宿泊施設	利用割合 (%)	国名	宿泊施設	利用割合 (%)
米 国 (国内 2002 年)	友人・親類宅	52.0	ドイツ (国内外 2002 年)	ホテル	46.0
	ホテル	42.0		長期滞在用住居	25.0
	キャンピングカー	7.0		友人・親類宅	12.0
	キャンビン・コンドミニアム	5.0		ペンション	9.0
	その他	8.0		キャンプ場	8.0
				その他	2.0
フランス (国内外 2002 年)	友人・親類宅	53.7	日 本 (国内 2002 年)	ホテル	37.5
	ホテル	15.0		旅館	32.5
	別荘	9.7		ユース・公的施設	6.8
	キャンプ場	5.6		友人・親類宅	4.7
	貸別荘・貸部屋	5.1		民宿	4.5
	民宿	3.9		会社の寮・保養所	4.5
	その他	7.0		車船中	4.0
英 国 (国内 2002 年)	友人・親類宅	35.0		山小屋・キャンプ場	3.8
	ホテル	18.0		ペンション	3.3
	移動住宅	18.0		別荘・貸別荘	2.5
	貸別荘・貸部屋	13.0		その他	1.9
	B & B	5.0			
	キャンプ場	3.0			
	セカンドハウス・タイムシェア	2.0			
	休暇村	1.0			
	船	1.0			
	その他	3.0			

資料：リゾート事業協会「リゾート白書 2004」

2. 海外の動き

海外の二地域居住に関連するトピック的な情報として、欧米各国で実施されているサマーキャンプを既往文献及びインターネット情報から整理する。また、有識者ヒアリングの結果から、スペイン及びイタリアの別荘事情を紹介する。

(1) アメリカのサマーキャンプ

- ・欧米諸国では、学校の夏期休暇にサマーキャンプに参加する子供たちが多く、二地域居住的な長期滞在を小学生の頃から経験している。我が国でも夏期学校という形で受け入れる施設はあるものの、2、3週間を超える長期間受け入れる施設は多くない。
- ・アメリカの小中学校では、6月中旬から新学年が始まる9月初旬までの長い夏休みがあり、子供たちの多くは、サマースクールかサマーキャンプに参加している。
- ・サマースクールは、小中学校や高校、大学などの教育機関が実施しており、アカデミックな内容が中心になっている。子供たちにとっては、補習的な意味合いもあり、成績が悪いと強制的にサマースクールに参加しなければならない。
- ・一方サマーキャンプは、多種多様なキャンプが各地で開催されており、子供たちが自分の好きなキャンプを選んで参加している。人気のあるキャンプは、3月頃に募集を締め切るところもあると言われている。
- ・サマーキャンプに子供を預ける親は、学校では経験できない体験や学習をする貴重な機会として、家庭教育の一環と捉えていることが多い。また、子どもたちがキャンプで楽しみつつ独立心を養っている間に、両親も二人で旅行を計画して、子供とは別の場所で二地域居住等を楽しむケースも見られる。
- ・サマーキャンプには、毎日通うデイ・キャンプと、主催地に泊まり込むレジデンス・キャンプがある。小学校の高学年以上になると、レジデンス・キャンプに参加する子供が多くなる。
- ・デイ・キャンプは、月曜日から金曜日の朝から夕方まで開催し、1週間から2週間単位で選択できる。レジデンス・キャンプは、プログラムによって開催期間が異なるが、短期で1週間、長期のものでは9週間のプログラムを用意しているキャンプもある。
- ・プログラムの内容は、複数のテーマを織り交ぜた総合的なプログラムと、あるテーマに特化したプログラムがある。テーマは表 -2-1 に示すように、アウトドアスポーツだけでなく、子供たちが興味を抱く様々な分野の体験ができる。
- ・レジデンス・キャンプでは、一般的に表 -2-2 に示すような施設が整備されている。体験できるテーマによって整備されている施設は異なるが、1つのキャンプ場で様々なアクティビティーを選択できる施設構成になっているキャンプ場が多い。

表 -2-1 アメリカ・サマーキャンプのテーマ分類例

大分類	小分類
アカデミック	動物 / 航空 / ビジネス / コンピュータ / 台所 / 天才的 / 国際研究 / 言語 / リーダーシップ / 教養課程 / 海洋生物学 / 数学 / 演説・討論 / ロボット工学 / 科学 / 宇宙キャンプ / その他
芸術	芸術と工芸 / サーカス / 陶磁器 / ダンス / ドラマ / 映画 / 魔法 / 音楽 / 舞台芸術 / 写真 / 劇場 / ビジュアルアート / 文筆 / その他
スポーツ	アルペンスキー / モトクロス / アーチェリー / オートレース / バックパッキング / ベースボール / バスケットボール / ボート / カヌー / チアリーディング / チェス / 聖歌隊 / 乗組員 / サイクリング / フェンシング / フィールドホッケー / 釣り / フットボール / ゴーカート / ゴルフ / 体操 / ハイキング / アイスホッケー / 乗馬 / アイススケート / カヤック / ラクロス / 武道 / 登山 / 自然観察 / ペイントボール / ラフティング / ラップリング / ライフル / ロッククライミング / ローラーブレイド / ヨット / スキューバ / スケートボード / スキー / スノーボード / サッカー / シュノーケリング / サーフィン / 水泳 / テニス / 陸上 / バレーボール / 水上スキー / 水上競技 / ウィンドサーフィン / ウィンタースポーツ / レスリング
ツアー旅行	冒険 / ティーンツアー / 荒野
スペシャルニーズ	喘息 / やけど / 癌 / 発育障害 / 糖尿病 / てんかん / 学習障害 / 注意欠陥多動性障害 / 身体障害 / 言語・聴力
減量	減量
軍とスパイ	軍とスパイ

資料 : <http://www.summercamps.com/>

表 -2-2 アメリカ・サマーキャンプの一般的な施設の内容

施設	内容
宿舎	・キャビンの場合は、性別、年齢別に 6 ～ 10 名の子供たちと、1 ～ 2 名のカウンセラーが宿泊する。 ・寮のような建物の場合は、2 ～ 3 人部屋で、各階にカウンセラーの部屋とトイレ・シャワー室がついている。 ・ベッドは 2 段ベッドで寝具は付いていないため、布団や枕を自宅から持ち込んでいる。
食堂	・バイキング形式で好きなものを取って食べるキャンプと、全員が着席して同じものを食べるキャンプがある。
保健室	・独立した建物や建物の静かな場所に、ベッドが 4 ～ 5 台の保健室があり、看護婦が常駐している。
売店	・周囲に店舗がない場所に立地していることが多いことから、キャンプ内には小さな売店があり、キャンプの名前の入った帽子やシャツの他、アクセサリーや日用雑貨、駄菓子などを売っている。
スポーツ施設	【施設例】 専用体育館 / 50m プール / スキューバ練習用プール / テニスコート / バスケットボールコート / バレーボールコート / 芝のグラウンド / 乗馬の馬場 / アーチェリー場 / 人工のロッククライミングの壁 / サッカー場など

資料 : わたなべたく「アメリカサマーキャンプ」2000 年 8 月

- ・参加費は、キャンプの内容によって異なるが、レジデンス・キャンプでは1週間あたり\$ 500 ~ \$ 800 が一般的であるが、\$ 1,500 以上の高額なキャンプも見られる。
- ・サマーキャンプのスタッフは、表 4-2-3 に示すとおりである。子供たちはカウンセラーと接する時間が長く、カウンセラーの接し方がキャンプの楽しさに大きく影響している。
- ・近年は、カウンセラーの募集をインターネットで行っているキャンプが多く、世界各地から応募がある。カウンセラー経験者は、次の年も同じキャンプでカウンセラーとして参加する人が多く、反復的に子供たちと二地域居住を楽しんでいる。

表 4-2-3 アメリカ・サマーキャンプのスタッフ

役職	職務内容
カウンセラー	・ <u>子供たちとキャンプ生活を共にして、安全で楽しく過ごせるように指導するスタッフで、大学生がボランティアで参加するケースが多い。</u>
常勤スタッフ	・キャンプの企画・運営を担当するスタッフで、オーナーが務めている場合もある。 ・シーズン前にカウンセラーを募集し、キャンプの基礎知識や子供たちとの接し方などを教える。
看護婦	・常勤の看護婦は、参加する子供たちの他に、カウンセラーや常勤スタッフの健康管理も行う。 ・キャンプ申し込み時に提出する健康診断表に基づき、アレルギーや喘息のチェック、投薬の確認、入院や通院の際の病院との連絡を担当する。
アクティビティ - 指導員	・簡単なアクティビティーはカウンセラーが指導を行うが、資格が必要な場合や、高度なアクティビティーではプロフェッショナル担当する。
その他	食堂のシェフ / 設備メンテナンス / 経理担当者 / 輸送スタッフなど

資料：わたなべたく「アメリカサマーキャンプ」2000年8月

■ペンシルヴァニア州「CAMP LOHIKAN」のマップとアクティビティ指導員



資料 : <http://www.lohikan.com/>

(2) スペインの別荘事情

- ・ スペイン人は、ほとんどの人が別荘を所有している。所有形態は、自分の別荘、親の本宅（隠居住宅）、親の別荘、農村部にある実家、と多様である。庶民は、またはが多く、自分の別荘を所有する人は、海沿いのマンションが最も多いと考えられる。
- ・ スペインの都市では、キリスト教の影響で週末に商店が休業してしまうため、週末には別荘で生活する習慣が昔からある。低所得者までもが別荘を所有する理由としては、コミュニティが欠落した劣悪な住環境や、別荘を持てずに都市に居住し続ける貧困層によって治安が悪化する都市から逃げ出すためとも言える。
- ・ 都市とは対照的に、別荘地ではコミュニティが成立している。また、子どもがバカンスになると、別荘が本宅の機能を果たし、長期滞在することになる。
- ・ 1週間の周期で別荘と本宅とを行き来している人も多く、一般的には平日は都市で過ごし、週末は別荘のある地域で暮らす人が多い。出勤日に別荘から車で都市に向かう人が多く、月曜日の朝は交通渋滞が起きやすい。
- ・ このように、スペイン人は別荘での二地域居住生活が一般的に行われているが、スペインにおける都市と別荘地の違いを整理すると以下のような特徴が挙げられる。

	都市	別荘地
居住環境	・都市の住宅はスペースが狭く、日光のあたらない劣悪な住環境が多い（建築物の規制が厳しく、都市の歴史的建築物は自由に改造できない）	・別荘は海沿いの地域が多く、余裕がある階級はさらに山間地域に別荘を持つ ・階層別に所有物件の種類、所在地域が異なる 伝統的な農村漁村集落の古民家や小都市の古い町家等（新築の倍以上の価格：旧貴族など上流階級の人しか所有できない） 伝統的な集落から少し離れた新築の建売別荘（成金等の高所得者） 田舎の分譲戸建別荘（中産階級） 海沿いマンション一室・1Rマンション（低所得者等最も一般的）
コミュニティ	・引越しが多く、隣近所のコミュニティが成立していない	・代々受け継がれるコミュニティがある
週末（安息日）	・都市の住宅は平日のみ（学校のある期間だけ）利用している ・キリスト教の影響で週末は商店が休業 ・都市には人がいない	・週末は別荘で家族や近所の人とともに生活する ・リゾート地では商店が開店している ・比較的都市から近い田舎の別荘を利用する ・別荘を隠居住宅として利用している家族も多い
バカンス期間中	・別荘を持たない貧困層だけが都市に残る ・家族は別荘にいたため、月曜日は、別荘地から出勤し、高速道路は午前4時から渋滞している ・仕事のある男性用に惣菜店とレストランが開業している	・子どものバカンスの期間中は、別荘を本宅のように、利用する ・仕事のある父親は別荘から会社へ通勤する ・別荘をいくつか所有する裕福な層は、都市から遠いリゾート地の別荘を利用する
現状と課題	・バカンス中に、都市に一箇所居住する貧困層のみが残り、組織化することによって、犯罪予備軍が結成される ・夏休みの間に取り残さる子ども達のため、対策を図らなければならない	・若い世代を中心に、郊外の別荘周辺に、戸建住宅を建て、通勤する人が増えてきた。上流階級と貧困層しか都市に住まないようになってきてしまう。

(3) イタリアの別荘事情

- ・イタリア人の別荘は、高所得者以外は、本宅のある都市や町から自動車で1時間から1時間半（一般道）の距離にあり、別荘から通勤もできる距離にある。一般的な別荘は、マンションの1室の簡素な部屋であることが多い。
- ・郊外に本宅のある人の場合、都心にセカンドハウスを持つ人もいるが、都心のセカンドハウスは、友人や同僚とルームシェアしている場合が一般的で、住環境はあまりよくない。
- ・イタリアでは、本宅とする家屋には固定資産税の控除があるが、第2、第3の家屋には控除がない。そのため、第2、第3の家屋の固定資産税から、第2、第3の家屋数を把握することはできるが、それが別荘であるか、物置であるのかは、特定できない。
- ・固定資産税は日本に比べて低いが、最近固定資産税に関わる増税策が決定され、第2の家屋から増税が実施することになった。このことから、イタリアでは税収増が期待できるほど、第2の家屋が多いと考えられる。
- ・イタリア人は、生まれ育った都市や町から離れる人は少なく、土着性が極めて高い。これは、日本のような相続税の制度がないことも影響していると考えられる。

3. 海外動向の総括

< 休暇制度と宿泊数 >

- ・欧米と比べると、日本は祝祭日が若干多いものの、学校休暇や就業者の有給休暇取得日が少なく、特に就労者の有給休暇取得日は10日未満と欧州の半分以上である。したがって、日本では、二地域居住の基盤条件となる長期休暇制度が現状では不十分な状況といえる。
- ・そのため、長期滞在が可能な貸別荘等の割安な宿泊施設への需要が少なく、短期滞在向けの高額なホテル・旅館等の宿泊施設の利用率が欧米と比べてかなり高い状況にある。

< 都市の住環境と別荘事情 >

- ・イタリアやスペイン等、ヨーロッパ諸国における別荘事情からは、別荘の種類をリゾート地におけるバカンス用と、都市近郊の週末滞在用の2つに大別することができる。
- ・ヨーロッパ諸国の場合、各都市の規模がコンパクトであるため、週末滞在用別荘までの距離が近く、別荘の高頻度の利用が可能となっている。
- ・一方、日本では、大都市周辺部はスプロール化が進んでいるため、ヨーロッパでは週末滞在用別荘地の位置する30km圏を越えて都市が広がっている。
- ・スペインでは、別荘を所有する理由として“都市の劣悪な住環境からの回避”があげられており、これと比較すると、日本では健全な郊外型住宅が整備されたという考え方もできる。

< 課題と対策 >

- ・都市と地方の二地域間の移動時間の短縮や、移動コストおよび滞在コストの軽減化に対する、より一層の緻密な施策の検討が必要となると考えられる。
- ・このためには、二地域居住の本格的な推進に向けた、就業者の長期休暇の取得と余暇時間の拡大が不可欠と考えられる。なぜなら、長期休暇の実現により、長期滞在が可能な貸別荘等の割安な宿泊施設の需要が拡大すると共に、滞在コストの低減化が進み、さらに反復滞在から長期滞在に行動形態がシフトすることにより、利用者が負担する移動コストの軽減する事が出来るからである。
- ・その他、二地域居住の推進のために、サマーキャンプ等の普及による小中学生を持つ若い親世代の自由時間の拡大を図ることなども、新たな取り組み課題となろう。